

第5回 虎ノ門フォーラム

主 催： 特定非営利活動法人ユーラシア21研究所
日 時： 平成19年10月3日(水) 18:00～19:30
場 所： 海洋船舶ビル10階ホール

プログラム

1. 開 会

2. 講 演

「ロシアにおけるネオスラブ主義の復活と日露関係」

講 師： 袴田 茂樹 (HAKAMADA, Shigeki)
当研究所理事、安全保障問題研究会座長
青山学院大学国際政治経済学部教授

3. 質疑応答

4. 閉 会

配布資料

- ・ロシアにおけるネオスラブ主義の復活と日露関係 (レジュメ)
- ・ウラジスラフ・スルコフ「ロシアの政治文化 ユートピアからの視点」(資料1)
- ・『安保研報告』平成19年9月27日発行 (資料2)

これからの虎ノ門フォーラムのご案内

10月31日(水) 18:00～ 「朝鮮半島の有事—四大国の対応—」
講 師：阿久津 博康
(特定非営利活動法人岡崎研究所主任研究員)

11月21日(水) 18:00～ 「北方領土の現状と今後の課題」
講 師：児玉 泰子
(当研究所監事、北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長)

ロシアにおけるネオスラブ主義の復活と日露関係

虎の門フォーラム 2007年10月3日 袴田茂樹

1、ヴァルダイ会議報告

①ロシアの自信と今年の会議の特徴

②首脳との懇談

- ・プーチン大統領との懇談
- ・セルゲイ・イワノフ第一副首相との懇談
- ・アレクシーⅡ世総主教との懇談
- ・シャイミエフ・タタルスタン大統領との懇談
- ・ヤプリンスキー、ジュガノフ、ジリノフスキー、イリーナ・ハカマダ

2、「主権民主主義論争」とロシアのアイデンティティ

①スルコフ大統領府副長官の講演 新スラブ主義

- ・プーチン大統領のコメント
- ・プリマコフ元首相による批判の意味

②砂社会におけるアイデンティティ模索と国家ナショナリズム

3、ロシアにおける大国主義の復活と新たな国際関係

①屈辱の90年代への反動としての大国主義ユーフォリア

②大国ロシアの復活と対欧米関係の冷却

お互いに相手に失望

③中露関係の変化

新たな経済摩擦

4、大統領選挙をめぐって

①プーチン大統領の人気

②ズブコフ新首相任命の意味

5、大国ロシアの復活と日露関係

①ロシアの「日本再発見」の背景

②北方領土問題

プーチン大統領の日本認識

③今後の日本の対露戦略

資料 1

ウラジスラフ・スルコフ 「ロシアの政治文化 ユートピアからの視点」

Владислав Сурков

Русская политическая культура. Взгляд из утопиию.

ЛЕКЦИЯ В ПРЕЗИДИУМЕ АКАДЕМИИ НАУК 2007.6.21

(Постоянный адрес документа <http://www.edinros.ru/news.html?id=121456>)

(要約 袴田)

ロシア民主主義の新しい建物は、ナショナルな国家性の歴史的基礎の上に構築される。その主な特徴は、わが国の歴史およびナショナルな自意識と文化の基本概念と鑄型構造によって規定される。

新たな政治制度は、ヨーロッパ文明から、しかもその特殊ロシア的な理解の中から生まれている。それは、自然的である限りにおいて、すなわちナショナルな限りにおいて、生命力を有する。

わが国の民主主義は、何か他と共通な点も有するが、また何か独特でもある。それはアメリカ、ヨーロッパ、アジアの成功した民主主義モデルと同様、普遍的であると同時にユニークで独特である。

ロシア文化とは何か。ロシアの思想家は次のように述べる。

イワン・イリイン(-1954) : 「ロシア文化とは、全体の直観 (созерцание целого) である。」

ニコライ・ベルジャーエフ(1874-1948) : 「ロシアに偉大な独特の文化があるとすれば、それは宗教的・総合的であって、分析的・細分的なものではない。」

セルゲイ・ニコラエヴィッチ・トルベツコイ(1862-1905) : 「ロシア人の認識の特徴は政界を宗教的直観により有機的全体としてとらえる。これに対して西欧哲学では分析的理性によって世界を細分化する。」

ヨシフ・プロツキーも「世界秩序全体の転換の理念」とか「ロシア語の総合的 (非分析的) 本質」について述べている。

つまり、ロシアの文化認識は全体論 (холистическое)、直観的、反機械論的である。つまり分析より総合、実利より理念、論理より形象、理性より直観、部分より全体が優越しているのである。この考えは、現実政治の特性を決める公理である。

ロシア政治文化の 3 つの特徴

- ① 「中央集権」による政治的全体性の志向
- ② 政治目的の「理念化」
- ③ 政治制度の「人格化（персонификация）」

今日でも中央集権が社会の安定化とテロへの勝利、経済発展をもたらしている。今日においても、国民の大部分にとって、強力な中央集権の存在が、ロシアの領土的、精神的、その他すべての全体性(完全性)の保障とみなされている。

大統領は、民主憲法の保証、三権分立のバランスである。このバランスの崩壊と時宜を得ない分権化は、常にロシアの民主主義を弱体化する。

ロシアのロマンチズムは、醜悪で身近な現実ではなく明るい遠方を、現実ではなく希望を、唯一の真実(プラウダ)や正義を見ようとする。イデアリズムにはメシア思想がある。第3のローマ、第3インターナショナルなどもメシア思想であった。

ロシアの政治文化においては、個人がすなわち制度である。ロシア人の全体的世界観はエモーショナルだ。それは、文字通り形象化（具体像）を求める。教書や綱領も意味をもつが、しかしそれらは、まずカリスマ的な個人の形象によって表現され、その後文字や論理がそれをサポートするのだ。

統一ロシアはプーチンを指導者とみており、その綱領を「プーチン・プラン」と名付けている。

ゴゴリも次のように述べている。「われわれは代議制を作れなかった。どんな会合でも、その場を仕切る者がいないと、カオスになってしまう。」

強い個人は、しばしば集団の効率の悪さ、相互信頼と自律性の欠如を補完しているのだ。

ロシア社会には集団性（社会性）が欠如し、個人主義が蔓延っている。人々が時に集団に身を隠すのは、権力、責任、労働から逃れるときだけである。

イデアリズムにおいては、ひとつの理念が崩れるとその全体を拒否して、まったく新たな理念を考え出す。こうしてロシアでは次々と新たな信仰と熱狂が生まれるのだ。

かつて一般のロシア人は、共産主義について、何もしなくてもすべてが手に入る社会と考えた。いま、民主主義について、まさに同じように語られている。それは一夜にして出現すべきもので、如何にそれを築くかは些細なことなのだ。そして、もしうまくゆかない

と、意気消沈し、シニシズムと失望に陥る。ピョートルの改革、2月革命、ボリシェビズム、ペレストロイカ、自由主義改革、等々。勤勉な仕事ではなく、世界革命、全人類的価値、市場の見えざる手、等々。こうして、今でも年金を一举に4倍にするとか賃金を5倍にするといった約束がなされている。それゆえに、リベラルにとって、ロシアの政治文化は時代遅れで進歩の障害と映るのだ。

ルソーは、ピョートル大帝を次のように批判した。つまり、ロシア人をオランダ人、ドイツ人にしようとした、と。ボリシェビキは何百もの民族を一つにしてソビエト人を作ろうとした。ペレストロイカ時代には、全人類的なる人種を生み出そうとした。90年代の改革派は、ロシア的とかナショナルという言葉を警戒した。彼らは、結局「ナショナルな、あまりにナショナルな」ものを克服することはできなかった。彼ら自身がロシアの一部だったからである。

文化とは宿命であり、ロシア人は現在も未来もロシア人でしかありえない。したがってその欠点を念頭に、その長所を生かして、競争力のある経済と生命力のある民主主義を構築しなくてはならないのだ。

ダニレフスキーは昔次のように述べた。外国人はロシアを知らない、あるいは彼らが欲するように、つまり、彼らの先入観に合致したようにしか知らない、と。

今日のロシアに対する前例のない圧力は、ロシアにおける民主主義の欠点ゆえであるというのは、ナンセンスだ。本当の目的は、ロシアの国家制度、国防力、自立性を弱めて、その天然資源を支配するため、という方がより説得力がある。しかし、これも単純化しすぎだ。ロシアは常に変態として見られてきたのである。欧州の統合、米国中心の統合のためにも、NATO 拡大や対ミサイル・システム配備のためにも、変態のロシアは必要とされたのだ。そのためにも、野蛮なアジア的ロシアという神話が必要なのである。

文化の矛盾は克服できるのか。完全な克服というのはあり得ない。しかし、文化の接近は可能だし必要でもある。ロシアはそのような接近に関心を有する。というのは、西側の知的資源へのアプローチなくして、経済の技術革新は不可能だからだ。文化の接近は、その均質化と多様性の否定を意味するのではない。

ロシアの民主主義は不完全だ。しかし、どこに完全な民主主義があるだろうか。ロシアに欠けているもの、西側から学ぶものは少なくない。近代化、人道主義、自発性など。ロシアでは自治制も市民社会も不十分だ。ただ、ジョージ・ケナンは1951年に次のように述べた。「啓蒙的でちゃんとした国家を建設しようとしている国民の歩みは、国民生活の

もっとも深く、秘められたプロセスである。外国人にはこの歩みはしばしば理解できないし、このプロセスへの国外からの干渉は、害をもたらすだけである。」

ロシアの未来は、自らの文化の枠外にはあり得ない。ロシアの民主主義は、他人から譲り受ける古着でもない。主権民主主義の概念は、ロシアの政治文化に最も適したものだ。その理由は

①ロシアにおける個人の、また世界におけるロシアの自己保存と発展のために、中央集権を認めるからだ。また、自由と平等、権利と義務、競争と協同、個人と国家、グローバル化と主権といった対立物の統合を可能にする。

②また、それはロシアの漸進的発展を保障する。

③主権民主主義のテキストは、人格化されている。それは、プーチン大統領の路線を説明している。

④この概念は、ロシアと世界に調和的な未来を示しており、それは懐疑や当惑も生むが、理想主義的であり、あるいはユートピア的でさえある。

世界には一次産業の国もあれば高度な産業の国もある。ロシアはどこに位置しているか。新技術や高度の金融サービス、効率経営、流行モードゆえにロシアに関心を向ける者はほとんどいない。世界は石油、ガス、木材を購入するためにロシアに関心を向けるのだ。国際分業では、ロシアは技術者、銀行家、デザイナーではなく、掘削作業員、炭鉱夫、樵である。ロシアは高度の教育と文化が発達しているというが、どうしてこうなのか。教育や卒業証書は何のためなのか。

あるエネルギー企業の経営者は、ロシアではどの専門の工業大学にも蒸気タービン発電の専門家が一人もおらず、教材としてのその設備を備えているところも一つもない、と指摘した。これは先進国ではごくありふれた技術である。学生は未来のエネルギー技術どころか、今日の技術も知ることができないのだ。ある農業技術学校では、1960年代に生産ラインから外されたトラクターを教材にして学んでいる。今の教育制度は、一部例外を除いて、前世紀の遅れた経済のための専門家を養成しているのだ。

最も価値のある天然資源は、知性である。国民の頭脳に、石油、ガス、丸太より価値のあるものをもたらさなくてはならない。文化、学術、教育は主要な生産力だということ、賢明で、健康で、自由な人々は、国家の最も重要な資産だということを認識しなければならない。

わが国は、開発者にとって魅力的で、学術研究が報いられる国にならなくてはならない。また、技術革新の分野での協力のために、世界の先進経済国と安定的な関係を保たなくて

はならない。

ペレストロイカおよびそれに続く初期の改革の時代の経験は次のことを示している。国際関係における一方的な譲歩は、何ももたらさないということ、相手は態度を軟化させるどころか、逆により圧力を強め、さらなる譲歩を迫ってくるということである。にもかかわらず、建設的な関係構築のためには、必要なコストはすべて払わなくてはならない。

わが国の企業には外国人の専門家が必要である。教育、学術機関には外国人の学者や教師が必要だ。知的分野での産業的な協力も必要だ。中国はゼネラルモーターズと、市場参入の条件として、最新技術導入の合意をした。かつて日本も同様のことをした。なぜわが国は、組立工場に限定しているのか理解できない。必要なのは、近代化ではなく、原理的に新しい経済、新しい社会である。技術革新の経済は、自由なくしては不可能である。

ゲルツェンがスラブ派と西欧派の対立に関して、次のように述べている。「われわれは対立していた。しかし、われわれには同じ愛があった。それは、ロシアの生活様式、思考様式への愛である。」